
ラブカクテルス その60

風雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その60

【Nコード】

N1068E

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は飲まなくてはならないカクテルをお出しします。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は使命でございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は何で？と聞いた。

長老を始め、村中からはそうそうたるメンツが私達を囲っている。皆が私を見つめ、その表情は真剣だ。

ことの始まりは雲だった。

山は世界を見下ろし、全てを見守る神とされていた。

恵をもたらすその自然は、私達全てがその恩恵を受けていた。

食物、飲み物、生活用品の材料、そして安定した気候。

山はまさに神だった。

しかしある日、山の頂上に怪しい黒い雲が現れて、その内、山を覆い尽くすと緑の自然から日の光を取り上げ、いつの間にか山は死ん

だように横たわって、何の恵みをも授けなくなった。それほどの深刻さを感じていなかった人々は、その山の痩せていく姿を見て、初めてそれが一大事だと気付いた。

何人かの勇者や学者が、その原因を調査しようと山の頂上に登った時のこと、その光景に驚きを隠せなかったと言った。

皆、下界から雲だと思って見ていたのが、実は途方もないくらいの大きな、真っ黒い不気味な木だったのだ。

山から細く、くねくねと頼りない幹が伸び、その上に信じられない数の枝が四方八方に伸び、その先には不気味な黒い葉が生い茂り、黒い花を咲かせていたのだった。

その巨大で、一所からでは端と端とが見てとれないほどのその木に、学者が触れ、調査を始めようとした時に、その木から声がしたそう
だ。

我は魔王であると。

そこにいた全員が声のした木の上に目をやると、それはそれは恐ろしい姿の大男が顔を覗かせて、続けて言った。

この山は我がもらった。

いや、やがてはこの世界もだ。

暗黒と殺戮の世界となるだろう。覚悟している。と。

その中にいた勇者の一人が、その言葉に腹を立てて、魔王と語る輩に槍を投げた。しかし、その槍ときたら、魔王の目の前でクルツと方向を変えて、凄い勢いで学者や勇者達に向かって飛んできて、人達は逃げ惑い、それをみた魔王はゲラゲラと笑っていたそうだ。

しかしその内、目が鋭くなった魔王が笑いを止めると、槍はまるで遊び飽きたかのように、学者や勇者達を貫きはじめ、襲われた皆はバタバタとやられていき、しかし勇者の何人かの健闘で槍を打ち落とすことができたが、その途端、木に咲いていた花びらがひらひらと落ちきて、なんとそれが気味の悪い兵士となって、勇者達を襲っ

てきたのだった。

その手強さといったら、さすがは魔王と名乗る手下だけあって、夕ダでは濟まないほどの強さに、数少ない勇者の半数以上は殺られ、その中の二、三人が命さながら、やっとの想いで帰ってきたそう。その話しはすぐに周りの村から、国中へと知れ渡り、いよいよ国王の名の元に軍勢が動き出し、山のその木を切り倒そうと向かったが全く刃が立たないと、惨敗の結果を背負って引き上げを余儀なくされたそう。

そして、国王が私達の種族に助けを求めてきたと、長老は私に言った。

私達種族は、実は得意な体質を持っていた。

遺伝からなる宿命というのか、運命というのか、普段、いや、場合によっては一生そんな呪われたことに関わらずに生きていくことさえできるのだが、今回はそうはいかないようだった。

私と、私の幼なじみの二人は、その能力が村の中でも、最も強い力を宿していると、村の主様からお告げを頂いたと、長老に言ってきた。

そして私はここに呼び出されたと言う訳だった。

私に切り出されたその話の内容は、驚くべき内容で、到底納得いく話ではなく、しかし断るなどのこちらの意見が選べる雰囲気さえないようだった。

私達種族の特性は、呪われた運命。

それは、もし、私達が自分で自分をあやめた場合、その骸が変気して、その姿は無敵の怪物になるというものだった。

しかし、もし一度その姿になってしまった者は、そこに存在しうる全てのものを壊し尽くすまで、いや、それだけでは飽きたらず、世界の全てを破壊する勢いで暴れまわり、悪いことにその時の怪物に

は、もう人としての理性がなかった。

到底、人達などの力では何の役にも立たないくらいのその荒れようは、まるで世界をも無くしてしまうかの勢いで、誰にもそれを止めさせることなどできなかった。

しかしそれを止める手が、一つだけあった。

それが、私の家系であった。

昔、種族の一人が化けてしまったとき、私の四代前のお婆様が、仕方なく変化した。

なぜなら昔からうちの家系の女だけは、白い龍に化け、その邪悪な姿になってしまった自分の種族を始末できる能力を持っている、まさにそれが自分の家系の使命なのであった。

そして私にも当然その血が流れている。

三代前の、要するに化けたお婆様の娘にあたるひい婆様は、四代前のそのお婆様が、白い龍の姿から元の姿に戻った時に、その時の話しを聞いたそうだった。

そして、お婆様はぐったりとした体を起こして、化けた者は心が焼ける様に痛いのだと涙を流して言ったそうだった。

白い龍となり、怪物になった者を始末している時に、初めてその叫び声を聞く。怪物は血の涙を流していたそうだった。

そんな悲劇は長老を始め、村の全ての人を知っている事なのに、どうして？と、私は思った。

そう、話しの本題とは、私の一番仲のよい二人を敵陣で変化させて魔王の軍勢を全て倒したところで、私に二人の始末をしろ、と言うものだった。

私の両横に座る幼なじみのイスワとバナウは真剣な顔で長老の話しを聞き入り、そして何の迷いもなく頷いた。

私はその堅い決意に挟まれながら、二人が今ここで死への覚悟を決めたことをひしひしと感じたのだった。

私は納得がいかなかったが、しかし彼らのその眼の鋭さは、そんな私の口を押さえ付けるようで、私はただただ歯をくいしばり、唇を

固く結ぶしかなかった。

長老の話しが終わり、三人が表に出ると二人は大きく息を吐き、しようがないか、と笑った。

そして私の肩を叩き、頼んだぞと、いつもの優しい笑顔で言った。

私は堪えていた想いがいきなり溢れ出して、泣いた。

そんな私を二人はいつまでも両脇に座りながら、優しく包んでいた。昔からそうだ。

二人はどんな時にも、私の傍で私を守り、支えてきてくれた。

まさかそんな二人の死を目の前で見取り、そして最後には私がそれを始末する。

まさに呪われた運命だ。

私の涙はその夜止まることを忘れ、いつまでも流れていたのだった。

その次の日は、村で盛大な祭り、二人の戦士を送り出すための清めの祭りが催うされた。

二人は豪勢に飾られた壇上で、酒とご馳走を前に、国王が用意した軍勢の勇みな踊りと、国一番の美しい美女の舞を見ながら、この世の最後の夜を楽し気に過ごした。

しかし私には二人の目が、明らかにそれを無理に受け入れている視線だったのが簡単に分かってしまった。

まだ、言葉も喋れない頃からの付き合いだ。彼らのことは、きつと親よりもよく感じ取れる。

そんな自信さえあった。

だから私はその用意された席に座ることができずに、家の部屋の暗がりですれを抱え、時が止まってくれないかと祈るくらいしかできないでいた。

翌日は穏やかな空に見守られた、いい天気だった。

これは彼らを祝福しているのか、それとも過酷な運命を嘲笑う、嵐の前の静けさなのか、当然わかる訳がなかった。村中の人々に見送られ、そこだけが黒で覆われている魔王のいる山を仰ぎ、私達三人は旅立った。

道中は、国王の軍勢が私達を山の麓まで見送ってくれ、そこから先は三人に世界の全てを託すと言い残して、その軍勢は敬意と期待を私達に手渡し、去って行き、三人はそれを大して気にも止めずに山の頂上を目指した。

山は登るに連れてだんだんと気温は下がりヒンヤリとし出し、辺りは何もかもが黒く染められた世界へと変わっていった。きつと魔王のところは近いに違い。

三人は一層の緊張感を前面に張りだし、いよいよだというその時に向かって足を弛めずに進んだ。

頂上は緑豊かな草原だった筈だ。しかし、そこに広がっていたのは、岩がゴロゴロと転がる荒地だった。

そしてその中心に立つ黒く不気味なその木は、迫力を伴った大きさを誇らしげに、そこに存在し、三人は頭上を仰がずにはいられなかった。

私達がそれに気を取られ、言葉を失い油断していたその時、その木の上から、何千、いや、何万の矢がこちらに向けて飛んできた。

あまりにも凄い数のその矢は、さすがに勇敢な二人であっても避けることができずに、イスワとバナウは真ん中にいた私を守るように体を背にして、自らを楯にすると、その矢を受け止めた。

口から赤い血を流す二人は、まだしっかりした目をキリツとさせたまま、震える手で地面に刺さっていた矢を、残りの力を振り絞って抜き取ると、拳に力強く握り、行くぞと、苦しそうな声を小さく拳げ、お互いの顔を見た。

そして切ない表情を私に向けてきたので、わかつてはいたが、いきなりやってきた別れに私は、何も言えずに二人の唇にキスをしてあげることぐらいしかできることがなかった。

しかしイスワとバナウは二人ともニヤリと笑うと、激しく叫びながら、自分の胸めがけて拳の矢を力一杯突き刺した。

イスワのしゃがみ込んだ背中からは、突然赤い鳥のような巨大な頭が起き上がり、変化が始まった。

みるみるイスワは身体の形をかえながら、その大きさを増した。

その姿は鋭い口羽を持った鳥の首の背に羽根が生え、胴体は馬のようにスラリとした四本足、そして尾は蛇そのものだった。

バナウはそれを見る間もなく、イワスと同じように叫び声を上げて、変化へと身を託した。

バナウの場合はその腹が裂けて、そこからやたらに口が大きなワニのような頭が出てきたかと思うと、みるみる巨大化し、変化した姿は、見るからに無敵の怪物だと言えた。

身体は突き出した角が無数に生えた頑丈な甲羅に被われ、手には鋭い爪が立ち、尻尾は十本もあるその先に、鉛の塊が付いている、まさに破壊力を強調する変化を成し得ていた。

私は少し下がった場所で二人を見守った。

そしてそんな二人の姿が堂々とそこに存在すると、やはり黒く不気味な木は、先ほどと同様に、何万もの矢を否応なしに飛ばしてきたが、変化をした二人にとって、そんなものは木の葉を振り払う程度ものだった。

その攻撃が無駄と悟ったのか、木は次に、話しに聞いていた黒い花びらを散らせ、それが兵士の軍勢となる攻めに出てきたが、その地面を埋め尽くすほどの数の黒い兵士も、バナウの大きな口から出されたもの凄い火炎と、重々しい十本の尾にけちらされて、あつと言う間にその半分以上がなぎ払われた。

そんな、崩れ傾きだした黒い軍勢に、次はイワスが背に付いた大きな羽根を飛ばたかせ始め、強烈な風を起こすと、それを受けた兵士

達はまるで、カミソリで切られたくらいの勢いで真つ二つになり、バタバタと倒れていった。

それに加えて、蛇の様な尻尾も、足元に散らばった黒い兵士達を一度に二、三十程度を一気にたいらげ、別の生き物の如く暴れ廻ったのだった。

そして二人の怪物は容赦もせず荒れ狂いながら、その軍勢を蹴散らし、いよいよその大きく黒い木にたどり着き、その幹を揺さぶり始めた。

さすがの魔王もそれは予想外だったらしく、慌ててその木から顔を出して、夢中になってたかっていた二人に向かって、スキを付き、後ろから攻撃を仕掛けた。

地面にヒビが走り出し、かと思うとその下から起き上がってきた、見たこともない鋭くトガツた太い根が、二人めがけて襲いかかる。

イワスとバナウはその攻撃で腹や背中に無数のそれを刺され、体中から酷い出血をしたが、それらをムシリ取ると、怯むことなく木を倒しにかかり、バナウは体を丸めて鋭い角の付いた大玉のように転がり体当たりを繰り返し、イワスは蛇の尻尾を幹に巻き付けて羽ばたき、その黒い巨木を揺すった。木は悲鳴を上げ始めた。

魔王は、止める化物と、二人の怪物を木から引き離そうと上から降り立ち、必死になって今度は枝を操り襲ってきたが、二人はそのしつこい魔王を睨みつけると、いよいよ力を注いで、とうとう黒い木を根こそぎ持ち上げ、魔王に向かってそれを勢いよく投げつけた。しかし魔王はその木を空で止め、怒りを表わにすると、その黒い木をイワスとバナウに向かって投げかえしてきた。

どうやら魔王は念力のようなものを持っているらしかった。不意を着かれた二人はそれを受けた拍子に倒れ、黒い木の下敷きとなった。

魔王は雄叫びを挙げ、イワスとバナウに両手を思い切り振り下ろし、そして雷を落とした。

もの凄い光に襲われた二人はさすがにぐったりとしていたが、魔王

がニヤついた次の瞬間にはもう、黒い木を持ち上げてそれを真つ二つにした。

それから魔王のところに進み出て、バナウが大きく口を開けると、魔王の頭に向かってかじりつき、続いてイワスが鋭い口羽を魔王の胸に突き刺したかと思うと、尻尾の蛇がその三人を縛るように巻き付き、二人はそのまま魔王を動かさないように押さえ付けた。

そこまでの素早い行動の意味が私には分かっていた。本当は迷いたかった。

しかし、私は反射的に変化をし、白い龍となって魔王に取り憑いたような二人もろとも、目にも止まらぬ速さで優しく包み込むようにその周りを回転し、やがて竜巻の渦に飲み込んだように全てを黄泉の国へと誘った。

魔王の叫び声が虚しく響き渡る中、私は二人と最後の別れを交した。体中を傷だらけにしながらも、痛々しいその姿とは裏腹に、イワスとバナウの顔は穏やかで、そんな二人を私は小さく消えて無くなるまで抱きしめ続けた。

気が付くと、私は山の頂上の緑豊かな草原で、一人ぼっちで泣いていた。

しかし、そこに吹く暖かな風と、のどかな草の香りは、今まで何もなかったかのようにサワサワと気持よさ気に揺れ漂い、その頂上の黒い木が生えていた中央には、柔らかい木の芽が二本、産声をあげていたのだった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1068e/>

ラブカクテルス その60

2011年1月26日01時52分発行